

第4回
農山漁村における社会的に関する検討会

農林水産省農村振興局

農山漁村における社会的インパクトに関する検討会
(第 4 回)

日 時：令和 7 年 3 月 10 日（月）13：00～

15：00

場 所：オンライン（Teams）

会 議 次 第

1. 開 会
2. 議 事
 - （1）第 3 回検討会の振り返り及び対応方針について
 - （2）第 4 回検討会の討議事項について
 - （3）意見交換
3. 閉 会

【配布資料】

- 資料 1 農林水産省説明資料①（第 3 回検討会の振り返り及び対応方針について）
- 資料 2－1 農林水産省説明資料②（第 4 回検討会の討議事項について）
- 資料 2－2 株式会社 Ridilover 説明資料（第 4 回検討会の討議事項について（補足））
- 資料 3－1 ガイダンス素案
- 資料 3－2 ロジックモデル案
- 資料 3－3 事例掲載イメージ
- 参考資料 1 「農山漁村における社会的インパクトに関する検討会」
開催要領（委員名簿を含む）
- 参考資料 2 プレスリリース

午後1時00分 開会

○農村計画課課長補佐 それでは、定刻となりましたので、ただいまから第4回農山漁村における社会的インパクトに関する検討会を開始いたします。

本日も前回に引き続きフルオンラインでの開催となります。傍聴者の皆さん、メディアの皆さんにもフルオープンとなっておりますので、御了承ください。委員の皆様はカメラをオンにいただき御発言のとき以外はマイクはミュートをお願いいたします。

なお、本日は本検討会規約に基づき座長御了承の下、参考人として株式会社 Ridilover、安部代表、堤マネジャー、国司サブリーダー、しずおかフィナンシャルグループ、平塚課長に御出席いただいております。

本日もですが、事務局側から御説明させていただいた後、残りの時間は全てディスカッションということになっております。

それでは、冒頭、早速議事に入りたいと思います。

最初に農林水産省農村活性化推進室長の朝日より前回までの振り返りと対応方針案、ガイドランスの全体像について御説明いたします。

よろしくお願いいたします。

○農村活性化推進室長 農林水産省、朝日でございます。

本日も皆様お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。

これまで3回やってきておりますが、3回の復習ということで1ページ目を見ていただきますと、まず第1回と第2回からの検討継続事項としまして、まず検討会の目的とスコープにつきましては、今年度は農山漁村におけるインパクトの可視化まで行いまして、次年度以降に具体的な農山漁村の課題解決の案件形成につなげていくという、そういう大まかなフレームの下でやっているということでございます。

こういった中で、ガイドライン全体につきましては、訴求対象となる企業が農山漁村における課題を自分事として捉えられるようにということ、それから当初から農村にヒト・カネを送っていく重要性をガイドラインの冒頭で重点的に説明してはどうかという御意見を頂いていたものと思っております。

それから、自治体の関係者、それから民間事業者、それから資金の出し手となる民間事業者、関係者それぞれが、それぞれどういう意義があるのかということをやちゃんと理解しやすいガイドライン構成にしていこうという御意見を賜りました。

また、アクティビティ・ロジックモデルにつきましては、企業版ふるさと納税の活用に当たって、企業側のインパクトの創出にどのように資するかということをしっかり整理していくということ。

それから、環境省や金融庁が公表しているグリーンボンド／ソーシャルボンドも参考としながら、そこで取り上げられている資金使徒との対応関係がしっかり、接続関係が分かるように整理するという事で、それについても整理予定であるということです。

それから、課題間・インパクト間、これはトレードオフの議論があるのではないかということで、これについて対応方針を検討しているということでございます。

第3回の議論としましてあった御意見、振り返りですけれども、太字のところを中心に御紹介しますけれども、全体としましてまず企業版ふるさと納税のメリットが伝わっていないという御意見を頂きました。ガイドラインにはしっかりと事例を豊富に入れるといいのではないかと、そういうお話であります。

それから、ガイドラインの最初の方で、ポンチ絵のような形で、農山漁村と都市それぞれにどのようなプレーヤーがいて、その間をつなぐ手段としてふるさと納税などを位置付けているというそういう関係性の理解を促す記載があるとよいのではないかとという御意見を頂きました。

また、ガイドラインにおいて、対象によって内容を切り分けまして、各対象に対するプレゼン用のサマリーがあるとよいのではないかと、そういう議論になったところであ

ります。

それから、本質的な課題を解決するために分かりやすい形で、How、どのようにではなくて、Why、どうして取り組むのかということをしかりと図式化してほしいということでもあります。

それから、ガイドラインではなくガイダンスなどの別の名称がよいのではないかという名前のお話も前回に頂いたと承知しております。

また、ガイドラインにつきましては、企業版ふるさと納税のプロセスとして、前回、弘前の事例が再び議論になったわけですが、事業部が直接的でなくても間接的に売り上げにつながるような話を持っていくと、社内決裁は通りやすいということで、そういった企業さん側がどういう社内決裁を、社内決裁も踏まえてどのようにしたらより話がつながっていきやすいか、案件形成しやすいかという、そういう御意見も出たところでもあります。

それから、その関連で事業部主導でやるということが重要であるということをガイドラインに書いてもいいのではないかと御意見も頂いたところでもあります。

そして、都市から農村への資金拠出のタイプとしまして、企業と自治体のつながりとしてソーシャルインパクトボンドなども選択肢の一つとして記載するとよいのではないかと御意見を頂きました。

また、インパクト投資のリストとして、インパクト投資を行う企業、金融機関が加盟するようなイニシアチブを窓口として列挙する。インパクト志向金融宣言、金融庁主導インパクトコンソーシアム、インパクトスタートアップ協会など、そういう窓口をしかりと列挙することが大事なのではないかという御意見でございました。

また、アクティビティ・ロジックモデルについてですけれども、ロジックモデルについては精緻な形よりは大枠を示していくことが重要なのではないかと御意見、一方でボトルネックの5に関連して静岡銀行が実施している御殿場市の高校生を対象とした取組を通じて、将来の関係人口が生まれてきている、という話で、地元の若者をどう絡ませていくのかという、そういう観点も入れたらよいのではないかと御意見を頂いたところでもあります。

次のページ、対応方針でございますが、これを踏まえまして、ガイドラインにつきましては冒頭の都市と農村の関係性を説明する箇所において、都市と農村のステークホルダーと、企業版ふるさと納税等のツールが分かるようなそういうボンチ絵を挿入してはどうかと思っております。

また、冒頭に概略を入れまして、ガイドライン全体の構成を示した後に、重要な論点を前半部分に集中させまして、ここを読めば読み手の行動変容につながるような内容とするということを書いております。

総じて、前回とにかく分かりやすいように、訴求するように、読んでもらえるようにという分かりやすさをかなり重視した御意見を頂いたと思っておりますので、できるだけそういう形で反映できればと思っております。

また、名称でございますが、ガイドラインではなくガイダンスということにしております。また、ここでインパクトという名称にするのか、今まで社会的インパクトとってきたわけですが、環境インパクトみたいな話もあって、社会、環境インパクトという言い方もあって、あるいは単純にインパクトという言い方もあって、これについて最近のトレンドというか傾向を踏まえましてどのような形で要望を打ち出していくかということについても、検討しておりますし、併せて御意見を賜ればと思っております。

第4章のインパクト投資のリストにつきましては、関係性のある連盟やコミュニティを提示する方向で調整しております。

アクティビティ・ロジックモデルにつきましては、事例もしっかりと豊富に入れまして、一つのロジックモデルについて一つの事例を紹介できるように作成しております。

構造化マップにつきましては、今年度は農業・農村について示すもので、アクティビティについては漁業、林業のものも対象にするということで、取りあえず年度末に一度成果

物を出すということで、農業の構造化の部分については一定程度議論が深まっているところではありますが、林と水はまた別の分野であって、それを必ずしも援用できない。一方で、アクティビティについては類似の事業が、林野、水産でも考えられるところでもありますので、そこは柔軟にアクティビティの中に、林と水はしっかり入れていくということをやっていきたいと思っています。

続きまして、第4回検討会の討議事項ということで、これを踏まえまして、ガイダンスをどうしていくかということを今回、まず議題としたいと思います。

詳細は、Ridiloverさんからこの後にあると思いますが、全体像として巻頭のコメントとしまして、まず農山漁村のインパクトの重要性について、有識者のコメントを掲載させていただき、2. はじめに、というところで読み手が趣旨をすぐに理解できるように、2ページ程度でガイドラインの大枠を説明していく。それぞれの章の対象や読み手、自治体・課題解決企業・資金拠出元企業、様々なステークホルダーがいるわけですが、それについての想定もここで記載していく。

そして、前半部分として最も伝えたい事項を集中させまして、読み手の行動変容を促せるようにどうしたらいいかということを工夫してまいりたいと思います。

農山漁村への資金拠出・人材派遣がもたらす可能性、それから人材派遣・資金拠出をしていくに当たって、必要なインパクトの視点。また、解決することがインパクト達成につながる具体的な農山漁村の課題、アクティビティ・ロジックモデルの具体例等々も踏まえて、これは巻末に従前より御紹介してまいりましたアクティビティからインパクトにつながるロジックモデルみたいなものを、ロジックモデル、セオリー・オブ・チェンジ、これを調整いたしまして、それなりの多くの事例について飽くまで例示ということではありますが、しっかりと列挙して具体的にこういうものがということが分かりやすいようにしていきたいと思っています。

後半部分は詳細版ということで、また3. を読んで更に詳しく知りたいと思った読み手向けにということで詳細を整理したものをここに載せるという構成にしてはどうかと考えております。

企業からの農山漁村への資金拠出・人材派遣の方法の詳細、農山漁村の課題解決に対する社会的インパクト評価の方法ですとか、事例創出のコミュニケーションなどであります。

参考資料としまして、今申し上げたようなアクティビティ・ロジックモデルの具体例、これは今調整しておりますけれども、その具体例と関連のリンク集ということで、これまで出てきたいろいろなリンクをつけたらいいのではないかと。すぐ飛べるようにということに対してもここでお答えできればと思っているところであります。

当方からは以上でございます。

○農村計画課課長補佐 それでは、続きまして、Ridilover、安部さん、国司さんの方からよろしく願いいたします。

○国司参考人 ガイダンスの全体像について、私の方から御説明させていただきたいと思っています。

ここでスライドで示していることなんですけれども、先ほど朝日さんからありました前半部分の簡略版の方で説明しているところを中心にまとめております。

まず、なぜこのガイダンスを作っているかというところで言うと、自治体と課題解決企業、資金拠出・人材派遣元企業の三位一体のエンゲージメント創出というのが大事であるというところを伝えるところが一番かなと思っていますので、冒頭でその辺りがなぜ必要なのかというところと、資金拠出・人材派遣元企業というような、その都市の企業というところから農山漁村へカネ、ヒトの流れを作る重要性というところを実際の農山漁村の課題とそれを放置することによって起こる問題、又はそれを解決することによって得られる機会という形で説明しております。

都市から農山漁村にカネ、ヒトの流れを作っていくに当たっては、社会的インパクトの

視点が必要だというところで右のようにまとめています。

このインパクトの書き方について、社会的インパクトとするのか単にインパクトとするのかというところは議論の余地があるかなと思っておりまして、後ほど皆さんの御意見も頂きたいなと思います。まず、ここでは社会的インパクトという風に書かせていただいております。

どのようなメリットが資金拠出・人材派遣元企業に農山漁村の課題を解決することによってあるのかという観点からメリットをまとめさせていただいております。

こちらは第1回、第2回の辺りで皆さんから頂いた御意見を踏まえてまとめておりまして、特に農山漁村というところは多面的機能というところがあることから、多様な社会的インパクトというものを生み出す可能性があるかなと思っておりまして、そのような効果を明らかにすることができれば、更に企業の資金拠出・人材派遣を促すことができるのではないというような書き方をしております。

次のページ、お願いいたします。

後半部分について、実際にそれをインパクトというところからまとめていくと、というところで、関心の高い社会課題、インパクトというものをまとめています。

この書き方についても、企業が関心が高いというところはもう少し具体的に書く必要があるのではないかとこのところは委員の方からも御意見を頂いているところでしたので、後ほど書き方については再検討したいと思います。

ここについては第1回、第2回の中で皆様に頂いたものを含めて農山漁村の課題というものと接続し得る社会課題というところを七つ挙げております。

それを基にアクティビティ農山漁村のアクティビティを出して、このアクティビティと社会課題、インパクトがどのようにつながるのかというところをロジックモデルで後半部分で整理しているというような流れになっております。

それに関しては、事例の方もJTBさんの事例であるとか、真庭市さんの事例というところを示しつつ具体的に見せていこうと思っております。

次のページ、お願いいたします。

実際のアクティビティ案というところは、以前も皆様に御検討していただいた構造化マップというところを基にボトルネックの解消策というところを農林水産省さんの政策とも関連するような形で七つ定義しておりまして、それぞれのアクティビティ案というところをそれぞれ出して、それぞれについてロジックモデルという事例を1対1で紹介していくという形で巻末の附属資料として追記していく予定でございます。

以上、簡単になったんですけれども、ガイダンスの全体像になります。

皆様にはそれも踏まえて、本日御意見を頂ければと思っております。

私からは以上です。

○農村計画課課長補佐 ありがとうございます。

それでは、本日は事務局から以上となりますので、以降は工藤座長に進行をお願いしたいと思います。

工藤座長、よろしくお願いいたします。

○工藤座長 今日が実質的には皆さんで集まる会としては最終回ということで、事前にこのファーストドラフトは目を通していただいている、場合によっては事前に皆さんからのコメントというのは集約されているという状態なんですかね。今日、まとめていただいたこれまでに出的意見みたいなものは反映された状態でこのドラフトは配られているという認識で合っていますか。

○国司参考人 先週、有識者の皆さんからフィードバックを頂いて見たという状態なんですけれども、頂いた時期によって反映できているものと反映できていないものというのがございまして、先週の水曜日時点で頂いていた御意見を反映させているという段階なので、

半分ほど反映はできているんですけども、半分ほど御意見を頂いているんですけどもまだ反映できないという状況です。

○工藤座長 なるほど、承知しました。ありがとうございます。

もうここからフリーディスカッションという感じだと思いますけれども、先ほど具体的には社会的インパクトかインパクトとどちらにするかという結構細かい論点も出ていたと思うんですけども、今日、ここである程度合意形成しておいた方がいいなみたいな、テクニカルな部分でいうと、ほかにここがちょっと気になっていますというところはありませんか。インパクトというか社会的インパクトというかということのほかに、テクニカルに詰めておかなければいけない、合意を取っておいた方がいいなというところはありませんか。

○農村計画課課長補佐 その細かいところの論点が合意を取っていただいた方がいいというところと、あとは構成の順番も変えましたので、その辺り、読みやすいかどうかというところとか、そういった点も含めて、御議論いただければと思います。

○工藤座長 分かりました。

そうしましたら、ちょっとここからフリーで、もしよろしければ今日の進め方としてはそういう意味で余り論点が明確に出ているという状態でもないと思うので、お一人お一人コメントしていただくのがいいかなと。もしかしたら既に事前に、事務局の方にフィードバック済みのところもあるかもしれないですけども、お一人お一人にコメントを回していってもらって、それからまた開いて議論するという形がいいかなというふうに思います。

目的としては、何度も御説明があったとおりで、都市から農山漁村に対して人的若しくは財務的なリソースが流れるようにしていくというのが、最終的なゴールということだと思いますけれども、今回のガイダンスというのは、そのためにもまずは整理するとか、そもそも農山漁村というところがどういう課題を抱えていて、それが都市にとっても何か関係のあることであるという、それは当然リスクにもなっているわけですし、場合によっては機会でもあるかもしれないというところの可視化、それがこの七つのインパクトというテーマに収れんしていくということだと思います。

それをしっかり情報としてまとめていって、三つの主要なステークホルダーに対して理解を促していくというところまでが今回のガイダンスの目的というところなのかなと思うので、一旦そこまでがちゃんと果たせるだろうかという観点で皆さんから御意見を頂けるといいのかなと思います。

主に、コンテンツの話をは是非集中的にさせていただいて、あとは構造とかスタイルみたいなところは個別に後ほどでもいいのかなというふうには思っています。

その先に来年度以降、実際の実証とか案件形成につなげていくというところは、このガイダンスで達成できることではないものの、これを読んだ人たちがそういう意味では自治体の方、課題解決事業、都市部の資金とかリソースを提供する側の企業及び金融機関という人たちが読んだ上で、何らかアクションをとるとか、関心を持って更に調べたりするみたいな、そういうきっかけになるというところまでがこのガイダンスかなと思います。それをちょっと意識しながらお一人ずつコメントを頂けるといいのかなというふうに思います。

そういう意味では、今日参加していただいている委員の方、ぐるっとお一人ずつ皆さんに御発声いただきますので、どなたからでも御準備ができた方いらっしゃれば挙手いただければと思います。

秋元さん、お願いします。

○秋元委員 ちょっと私が事前レクがぎりぎりだったので、フィードバックは反映されていない前提なんですけれども、前回お話ししたことも含めてというところです。事務局の方

は2回目になってしまうかもしれません。

まず、1点目は分かりやすく、自分事に捉えてもらうというところが非常に重要なのかなと思っている中で、事例の豊富さみたいところは意識したいなと思っています。今回のこの検討会で出た事例とかは全部盛り込んでいただいていると思うんですけども、できれば例えば地元の企業さんが何か関わっている事例とか、大きい企業さんがやっているというのは何か一つ事例としてもすばらしくインパクトがあるんですけども、自分事として捉えるという意味だと、少し小さい取組とかも意識的に拾えるといいのかなと思っています。

そういう事例もなかなか私自身そんなに詳しいわけではないんですけども、今、ここにいる委員の皆さんから本当に小さい事例含めて集めていくことで少し事例の網羅性みたいなところが出てくるのかなと思っているので、そこはお願いしたいなと思っています。

もう1点が、インパクトを評価していくプロセスとかどういうふうに形にしていくかのところは、結構専門性も高いですし、分かりづらい部分かというふうに思っていて、後半の部分は表を入れたりとより分かりやすくなると思います。後半と言っているのは44ページとか、インパクトの設定、ロジックモデル作成のところはよりちょっと図式化、表とかで視覚的に分かりやすくしていく。また、これもちょっと難しいかもしれないですけども、民間ではない企業さん、協会さんで困ったときに相談に乗ってもらえる窓口みたいところに誘導できると、迷って結局分からなくてやめてしまうみたいなことはないかなと思っているので、何か問合せ先みたいなのところとかが出口としてあるといいかもしれないですね、というお話をさせていただきました。

すみません、ちょっとかぶっているというかそのままなんですけれども、補足としてです。

○工藤座長 ありがとうございます。

事例のところは、おっしゃるとおりだなと思っていまして、何か具体的にどういう観点で補足というかももう少し充実させるどういう例えば事例なのか、どういうアングルを強調した方がいいとかというのはありますか。

○秋元委員 そうですね。企業版ふるさと納税が使われているかどうかというのは私は分かってないですけども、自治体さんと話をしていると、地元の新聞社、地元の商社、地元の老舗企業、東京にいる私は知らなかったりするんですけども、その地域ではずっと昔から頑張ってこられた企業さんと自治体さんが案件を御一緒するケースは非常に多いと思っています。

今回の今載っている事例もすばらしいんですけども、よりローカルなというか地元の中で動いている企業さんなど、課題解決企業に関しては少し小さいローカルなところとかの事例が入れられるといいのではないかと思います。

すみません、私も事例を調べますと言って、まだ調べられてないですけども、もしほかの皆さんでもこういう事例がいいのではないかと、細かい事例とかも入れられるといいかなというふうに思いました。

○工藤座長 ありがとうございます。

増岡さん、お願いします。

○増岡委員 私も事務局の方とお話ししたのが週後半だったので、ちょっと重複する部分がございますけれども、まず全体感のところでも申し上げると、以前の検討会で申し上げた、農村と都市の関係のところをポンチ絵にさせていただいており、これは非常に分かりやすくなったなと思っております、ありがとうございます。

これをせっかく入れていただいたので、もう少しクエストですけども、何度も申し上げて恐縮なんですけれども、1回目の発表の際も少し触れさせていただいたようなラン

ドスケープアプローチ、またカタカナで申し上げて恐縮ですが、農村を景観として捉えたときに、そこには行政だったり、農林水産業者、農協とか漁協、森林組合、地元の企業、住民の方、複合的な多様なステークホルダーが農村が抱える課題に一体になって総合的に取り組んでいく、そういったアプローチというのは非常に有効だと思っていますので、そういった観点を是非入れていただけると有り難いと思っています。

何度もこの場でもTNFDとかネイチャーポジティブとか、そういった観点でお話しさせていただいていますけれども、ここで書いていただいたポンチ絵は都市から農山漁村にヒトやカネが流れるような絵になっていますけれども、今、グローバル、国内ともに非常に盛り上がっているTNFDという議論も、これまで自然が喪失し、地域のリソースがどんどん消費されてきた状況を反転させて回復させていく、そこに資金を振り向けていくというような、正にここで書いていただいているベクトルと全く同じ方向でグローバルな議論が進んでいますので、是非そういう議論に乗って、この議論についても進めていくのが非常にいいかなと思っています。

そのTNFD開示の枠組みにおいても、企業が特に重要なガバナンスのパートにおいて開示すべき内容として地域コミュニティとのエンゲージメントというのが入っています。正に農山漁村とのエンゲージメントということになるとと思いますので、企業、都市から地域、農山漁村にベクトルを向けていく、そのような観点で企業が取り組んでいる課題にレバレッジを利かせて、このガイダンスをいいものにしていくというのもありかなと思っています。

直接的に農山漁村と関わりのない企業であっても、バリューチェーンを通じて一次調達先かもしれないし、二次、三次かもしれませんけれども、バリューチェーンを遡れば最後は農山漁村、自然のリソースというところに行くと思いますので、どういったリソースに依存しているのか、その事業活動によってどういうインパクトを与えているのか、それがひるがえって企業に対してはどうリスクと機会に跳ね返ってくるのか、この関係性を是非この議論の中でもうまく活用していただけるといいのではないかと思います。

ちょっと個別のところでも申し上げると、冒頭に事務局からも今回の議論の目的というのを非常に明確にさせていただいていると思うんですけども、ガイダンス上、もう少しはつきり伝わるように書く余地があると思っていますので、農林水産省さん、農山漁村が抱える課題を解決するためのパーツというのは非常に多く入れていただいていると思うんですけども、それを企業とか民間事業者に求めていく際の企業側にどういうペイン、ニーズがあるのか、ここをこの検討会の主体としては課題認識を持って、このガイダンスを作ることによって、何の役に立つのか何に使えるのか、こういうところをより明確にしていくと、このガイダンスというのが使われるものになっていくのかと思います。そこをもう少し明確にする余地があるのかなと思いました。

あとボトルネックの抽出、構造化とともにやっていただいている分については、解決の方向性を幾つか書いていただいているんですけども、ボトルネック自体を解決しようとするような話になっている感じがして、ボトルネックがあって、それに対してふるさと納税とか、インパクト投資、インパクトデッドとかそういったインパクトファイナンスを使って、取り組んでいくことが有効だとか、ロジックモデルを使っていくことが有効だとか、そういう話になかなかない感じがします。例えば農村における所得の向上と雇用の創出とか、そういうパートがあったかと思うんですけども、流通構造で中間マージンが多いとか、そういったところで課題が書かれていて、それをより効率化していくことだというのが話になっているんですけども、これは多分課題自体をどうやったら解決できるかという話になっている感じがしています。

このガイダンスはそれをインパクトロジックモデルを作って、民間の人たちがつながり、関係性を確認して、ファイナンス、人を送っていくという、そういう方向に持っていきたいという話だと思っていますので、いきなり解決策の方に話がいつている感じがして、そこを丁寧に書く余地あるのかなというふうに思います。

バリューチェーンの中間マージン減少とかコスト高となる環境配慮型農業の導入と書い

ていただいているんですけれども、多分農山漁村に対して関心を向けたりとか、リソース、ヒト、カネを流していくというときには、正に持続可能な農業とか、自然の価値とか環境価値、これまで可視化されてない価値というのを見える化して、その企業がプライシングに折り込んでいくとか、そういった流れにしていこうということが必要かと思っています。

そうなってくると、自然系のカーボンクレジットとか、バリューチェーンを通じたインセットとか、そうするとファイナンスの対象にもなってくるとか、そういう話の展開もあるかなと思いましたので、個別の課題の解決に話がいつてしまっているのは少しもったいないかなというふうに思いました。

後半の方でインパクトの評価の方法というパートで気になったのが、インパクトの可視化の作業を誰が何のためにやるかというところが、もう少し書いていただくと分かりやすいのかなというふうに思いました。

これは読み手としていろいろな人がいると思うんですけれども、企業の人、金融機関の人、自治体の人とか、例えば自治体の方はインパクトロジックモデルを作る主体だと想定されているのか、インパクト評価をしないといけないのか、それは企業がやるんですよということなのか、その辺が今回ガイダンスで提案という形にするのか、いろいろなパターンがありますという形で示すのかもあると思いますが、誰が何をやることをこのガイダンスでは期待しているかというところと、そのメリット、ロジックモデル化することによって、見えてくるもの、結構最初の方で議論があったかなと思っていますので、その部分を盛り込んでいただくといいのかなというふうに思いました。

一旦、以上にさせていただきます。

○工藤座長 ありがとうございます。

ちょっと理解のためにお伺いしたいんですが、今、1個前に御指摘いただいた個別の課題の記述になっているという論点は、ボトルネックに対して、その記載されている解決策はそれはそうなんだけれども、今回、資金や人材を都市からならしていこうという文脈とちょっとずれているんじゃないかという、そういう御指摘ということですか。

○増岡委員 そうですね。幾つか気になったところはあったんですけれども、さっき申し上げたような流通構造が複雑とか中間マージンが高いというところで、結果として農村における所得の向上につながっていないという記載があったりするんですけれども、その後にバリューチェーン内の中間マージンを減少させることで、課題解決につながるのではないとか、それは確かにそうなのかもしれませんし、それは中間マージンとか流通構造の複雑さというところを解決するためにアプローチになると思うんですけれども、それをやってもらうことがこのガイダンスの、あるいはそういう動きを促していくことがこのガイダンスの目的ではないのではないかと思います。

バリューチェーンの流通構造が複雑で、中間マージンが高いというところの課題をここで書いたときに、企業に対して何を求めていくのかというのがちょっとよく分からない。

○工藤座長 なるほど、企業にそれを言われてもみたいなのところもありますよね。

分かりました。ありがとうございます。

前半御指摘のあったポンチ絵のところは、私も気になっていたところがあって、少しコメントさせていただくとすると、今、置いていただいている絵は細かいといえ細かいんですけれども、都市の方が農山漁村分野への援助することが可能という書き方になっていて、ただ社会的インパクトと農村課題の取組の関係性が分からない、実務的な課題が書いてあるという感じだと思うんですけれども、この章でもともとと言及されているというか、説明していることというのは、そもそも都市部が農山漁村が大変だから支援をするのだという関係性ではもはやなくて、農山漁村のピンチというのは都市のピンチでもあるという、そういうことを多分伝えたかったということはあると思うので、増岡さん御指摘のとおり結局サプライチェーンを遡っていくと、あらゆるところで自然資本にいくよねとい

う話に近いと思うんですけれども、インパクトトリターンの矢印が入ったのはよかったなと思うんですけれども、ここはまだ何となく援助するのだというふうな枠組みになっているところがちょっと気になったので、この辺りはもう少し文章で説明していただいているところと併せていくといいのかなというふうに思いました。

では、大塚さん、お願いします。

○大塚委員 今回の増岡さんが御指摘されたことと僕は真反対のことを言っておりまして、事例をどんどん見せていって、それでよいと、それが伝わるべき人に伝わるようにして、教科書的なところはもう省いてしまえというコメントをさせていただいたので、そのところなんですけれども、全体的に事務局の方からお伝えありましたが、結構やっぱり対象となる人が違う人たちの方が3種類いると、自治体とありますけれども、具体的にいうと自治体の担当者レベルの人、地方自治体の担当者、課長以下ぐらいの人だと思います。というところがまず一つターゲットなのかなというところと、あとは中間的なところにいる民間事業者、これはいいと思いますけれども、もう一つは企業版ふるさと納税でお金を出す、若しくは人を出せる企業なのかなと思っています。

逆に言うと金融機関というものが、これは対象ではないんじゃないかと思っていたんですけれども、ちょっとその辺含めてターゲットとコンテンツ、誰に何を届けるのかというところはあらかじめ整理した方がいいのかなと思った次第です。

その中でいうと、自治体の人と特に企業版ふるさと納税でお金を出せる、でもJTBさんに頼めるほどお金がないというところと思ったので、それぐらいのところが扱いやすいものになるといいのかなと思った次第です。

その中で、それでもやっぱりちょっとまだどこをどう見たらいいのか分かりづらいなというところがどうしてもいえないなと思ってしまして、もうちょっとフローチャートじゃないんですけれども、どういう人はどこを見ればいいのかみたいなものが何か分かりやすくなると使いやすいものになるのではないかなというふうに思いました。

先ほど、秋元さんからあった民間事業者、地元の企業がつながっているところというところ、我々食べる通信というものをやっております、例えば北海道たべる通信というのは、十勝毎日新聞がやっていますし、愛媛、高知食べる通信、地元の大手の広告代理店さんで、上場しているセキさんというところがやっているんですけれども、事例としては企業がやっているというところは我々も出せますので、必要であれば情報は提供できると思います。

○工藤座長 ありがとうございます。

I MMとかインパクト評価のところはどうですか。

○大塚委員 余り難しくない方がいいんじゃないかな、ではあります。

○工藤座長 そうですね。

秋元さんも御指摘いただいていますけれども、ちょっとやっぱりここが何となくすごく丁寧に書いていただいて、かなり場合分けをいろいろしていただいている気がするんですけれども、ずっと読んでいるとしんどくなってくる感じもあるかなと思うので、やはりその本体部分とあとは詳細はアペンディックスというところのバランスみたいなのはちょっとやっぱりここが余りにも専門的な話になっていくと、途中でぱたりと閉じなくなってくるところもあるのかなというふうに思いました。

ほかの方、いかがでしょうか。

平澤さん、どうでしょうか。

○平澤委員 皆さんの御指摘を踏まえながらなんですけれども、恐らくターゲットではないところのページも知ってほしいんだろうなというのがあるのかなと思って、全部網羅的になっちゃっている部分があるとは思っていて、これはちょっと難しいところだなという

気がしています。

個人的なところでいうと、今回は農山漁村における課題解決というのが、ソリューションによってはインパクトの創出につながるという話だと思うんですけども、それを三角形でまとめているような三者で共創して取り組むことというのが大事なんだよという話だと思うんですけども、それをやることで社会的インパクトの創出につながりますという概要のところはパワーポイントとか、企画書でいうと多分概要の1枚目が三つのポイントで、目指すべき達成したい目標というのが社会的インパクトで、それに対してできることというのがロジックモデルと各事例集みたいなお話になってくるかなとしたときの、3者で取り組むべきというのが社会的インパクトに向けた課題解決というところがちょっと分かりにくいかなというのが、冒頭のこのポンチ絵を入れたところでもう少しやはり丁寧に説明した方がいいのかなと。このガイダンスをもって3者それぞれがどういうことに取り組むかというのは書いてあるんですけども、なぜそこをやるのかみたいなのはもう少し丁寧にやる必要があるなというところが一つです。

もう一つが、ちょっとちゃぶ台返しに近いんですけども、七つのインパクトは本当にこれでいいのかというのは、ちょっともう一回議論をできる機会があればちょっとしたいなと思っていて、自治体側からすると結構距離感が遠いんですよね。企業にとって大事なポイントと自治体にとって大事なポイントは実は結構差があるというか、視点の違いがあるので共通になりにくい部分があるなと思っていて、今回、我々委員では社会的インパクトの可視化というところがベースになっていると思うんですけども、その社会的インパクトというのを双方向が共通でイメージを持てるようなものにするというのが、ちょっと役割の一つなんじゃないかなと改めて資料を見て感じていたところだったので、これは後ほど時間があれば議論できたらいいかなというふうに考えております。

○工藤座長 ありがとうございます。

ここはとても大事なテーマですね。

安本さん、どうぞ。

○安本委員 皆さんがいろいろな角度から御指摘をされているので、取りまとめるところが大変かなと思っています。

今までのお話をいろいろ伺っていて、今回ガイダンスを作る目的というのは、まず第一義的には企業版ふるさと納税を活用を促して、この3者が同じ絵を見てこの取組が膨らんでいくことなんだろうというふうになったときに、これが第一義の目的だというふうに認識した場合に、これを使って誰を動かしたいというところが、私の中だと、最初企業版ふるさと納税ということですので、設計をする自治体さん、自治体さんにまず理解してもらって、自治体がその仕組みを作って、資金拠出をしたいというふうに思わせる仕組みを作って、そして課題解決する、企業を巻き込んでいく、このプロセスがあるという認識をしたので、そういったこれを使って誰がどう動き出して、この三つの仕組みをワークさせて機能させていくかというところの視点で作っていくべきなのかな。そうするとこのガイダンスが有効に機能して第一義的な企業版ふるさと納税の活用がいろいろなところで生まれてくる。そういうふうな私は理解をしていて、そういう流れで基本的にお作りになった方がいいかなと思っておりました。

私からは以上です。

○工藤座長 ありがとうございます。

読み手が結構いろいろというところなので、なかなか包括をするのは難しい。

竹下さん、どうぞ。

○竹下委員 私は1点なんですけれども、国司さんには直前にお会いしたので、また重ねてになってしまうかもしれませんが、今回のガイダンスの中で一番重要ではないかと思

っているのが、4章の事例創出のコミュニケーションのところをどうファーストステップに落としてあげられるかというのがとても重要だと思っている中で、これは私もなかなかアイデアがないので皆さんの御知見もお借りできたらなと思っているんですけども、前回、こういう企業に当たったらいいよという企業群とか、あと企業版ふるさと納税の場合についても結構地域内企業の開拓とか、地域外企業の開拓とか、割と今は企業版に力を入れたいと思っている自治体さんについてはもう既にアクションしているような内容かもしれないなと思ったりもしていて、こういう企業とどうつながれるのか、特に大手企業の場合まずどこにつながりに行ったらいいのかという、そのファーストステップの提示というのがすごく重要ではないかというふうに思ったときに、例えばなんですけれども、企業版ふるさと納税のマッチングイベントとか結構増えてきている印象もあって、そういうものを少し、企業版ふるさと納税の内閣府のポータルサイトのURLは確認しているんですけども、そのパッケージではなくて民間がやっているようなイベントの案内、URLだったり、そういうものをまとめてあげられるともしかしたらまずはここに参加しようかなみたいな形で、ファーストステップは歩みやすいのかなと思ったりしていましたので、ちょっとこの4章の部分、皆さん御意見とかアイデアがあればお話しできるといいなと思いました。

○工藤座長 ありがとうございます。

すごく大事なポイントです。

田中さん、お願いします。

○田中委員 私の方からはやはり企業と農山漁村、あるいは農林漁業というのが非常に普通は遠い存在になっていると思います。企業が農山漁村、農林漁業に関わることのメリットは何かというのが分かりやすく示される必要があるのかなと思います。

それが実際にビジネスになっているケースもあるでしょうし、あるいは企業価値を上げるとか、企業そのものが抱える課題の解決になる。健康経営、環境経営、そういったものの企業の農山漁村に関わることで企業が企業の経営課題解決につながっているという、そういうケースもあり得ると思うので、やはりそういった事例、関わるメリットを分かりやすく伝えるというのは、すごく大事なかなと思っています。

自分事にしていくというところでは当たり前のことなんですけれども、農林漁業というのがどういう存在なのかという、我々の日々の食を支える産業ということで、つまり健康、命を支える産業ということで、国にとって最も大切な産業だし、国民一人一人、あるいは全ての企業に大切な産業であるということをしっかり理解してもらうというところも当たり前なんですけれども、大事なのかなというふうに感じています。

○工藤座長 ありがとうございます。

企業の具体的なメリットみたいな、どこの部分で補強するとよさそうですね。

○田中委員 我々が今感じている、我々自身もそうですし、前に少し御案内した Well-being in Nature という社団もそうなんですけれども、やはり健康、癒しという側面に注目しています。

企業の健康経営の水準もそうですし、例えばダイレクトに企業じゃなくて、今ちょっとお話ししているのが生命保険会社さんが加入者の方たちのヘルスケアというのに取り組んでいて、メンタルヘルスのチェックする機能を持っているんですけども、そのメンタルの状態を把握した上で、その解決方法をどうするかといったときに、農山漁村というのはすごく有効なのではないかというお話があったりして、その健康、癒しの機能というのは農山漁村が持っているという、そこに着目したビジネスというのはちょっとあり得るかなと我々はちょっと今思っていたりします。

○工藤座長　そういう意味では事例として、このガイドダンスの中に入れていくみたいなの
が。

○田中委員　そうですね。いろいろな事例を、農山漁村に関わっている企業というのはい
ろいろあると思うので、もっと事例を分かりやすい事例を出して、自分たちの企業もこ
ういう関わり方できるんだな、みたいなのが見えてくると、それはやはりなかなか見え
る企業は少ないと思うので。

○工藤座長　ありがとうございます。

参考人の皆さんも、もし御発言されたい方がいらっしゃれば、大丈夫ですか。

○安部参考人　皆さん、本当に忌憚なく意見を頂いて相変わらず最高だなと思っておりま
す。

作り手側の国司や堤の気持ちを思うと、ここに来て七つのテーマの真意を問われるとい
うのは、最高にロックでいいなという感じなんですけど、でもそれは多分皆さんの中で、
ここで出てくるような3者からの遠さというものがより議論になって深まっているし、更
には農林水産業全体と国民の距離の遠さも改めて認識がそろってきたからこそ、どうや
ったらファーストステップを低くしていけるかとか、いかに誰を巻き込んでいくのか、その
ときの戦略的な、あるいは戦術的な具体的な最初の巻き込み先は誰なんでしたっけ、とい
うようなところの議論に意識がいった上での話で、同じような論点に戻ってきているよう
に見えて、らせん階段を登っている形で非常に議論として建設的でいいなと思って聞いて
いたところです。

それこそ冒頭のところで秋元さんから、具体的な事例はどんなのがあるといいですかと
いうときに、例えば地元の中小企業みたいなのを想定したようなものもあった方がい
い、こういうような話が具体的な話として出てきたのかなと聞いていて思いました。

確かに、企業版ふるさと納税、遠くの都市部の企業から取ってくるのではなくて、ルー
ル上、どうしてもその地域内、自治体内の事業者さんは寄附できませんけれども、隣の自
治体ならできるという、近隣自治体にもターゲットを当てて、そこにおけるこの事業者が
いい、例えば建設業は意外に内部留保がある、こういうところも含めて具体的なアクション
として、狙いを定めて、大企業以外でも確かにお金の出し手になっていくような事例み
たいなものもあり得たりするので、こういうようなものとかも含めて幅広に拾い上げてい
けるといいだろうなというふうに思ってきたという話のところを聞いていて思いました。

あとやっぱり平澤さんの話であったり、安本さんのところの話でも頂いたような自治体
が先なんじゃないのか、何から動き出すのかという話は、これはちょっと議論のポイント
になるかなと思っています。

実際に、ふるさと納税の話というのをいろいろ見ていると、もちろん自治体の動き出し
もとても大事なんですけども、自治体が動き出しても必ず営業する企業が動きがロック
されて、もうどうしようもない。一応、お話を聞くんだけど、中間支援団体に聞いて
も、自治体の努力が足りないんじゃないですか、みたいな感じで言われちゃって、そんな
こと言われてもかなりこれは無理なゲームなんじゃないか、みたいなそう思っちゃうみた
いな話もよく聞いているという意味で言うと、自治体が動き出さなきゃいけないというの
は大事な論点だという話である一方、お金の出し先の人たちというのが、やりたいですと
手を挙げた状態で自治体が動き出せるように作ってあげた方が、実は価値が高いんじゃない
かというのは、個人的に聞いていて思ったところで、この辺はどちらが先なのかという
のは、結構議論する余地があるかもしれないなというふうに思います。

あと増岡さんの話で、受け止めとして聞いていたのは、ソリューションの方にも効果の
副次性みたいなものがちゃんとある感じで、課題が構造的であるがゆえに、アクションと
してのアクティビティに対して副次的な効果の広がりみたいなものがあるはずだけど、そ
この部分の記載が不十分なのではないかということかと思ったので、そういう意味でいっ

たら、文章で補足できる余地がまだあるのではないかと思ったので、そういうことなのかな、認識はそういう感じですかみたいなことは、増岡さんに聞いてみたいと思っておりました。

○工藤座長 ありがとうございます。

ほかの方はよろしいですか。

増岡さん、どうぞ。

○増岡委員 私も具体例はふんだんに入れた方が読み手にとってイメージアップにつながるので非常にいいと思っています。ここは全く異論はありませんし、申し上げたのは途中で書いていただいているボトルネットがありますというところに対して、その解決策はこういうことがありますと、この課題にはこういう解決策という風にひも付けがされてしまっている感じがして、多分ほかにもいろいろな解決策とか、経路があるはずだと思っている、やや少しロジックがジャンプしている、ものによっては若干短絡的になっている部分があるかなと思っていますので、ここは正にロジックモデルを後ろに付けていただいているので、その課題解決にいろいろなパスウェイがありますよねということだと思っていますので、このインパクトロジックモデルを活用しながら課題を解決に向けていく。

安部さんがこう解釈しましたと言っていたのとおりかなというふうに思っていますので、いろいろなバリエーションが主体によってもあると思いますし、取り得るアプローチ、それぞれがいろいろな、たどり着くインパクトも一つではないと思います。これもロジックモデルを作ることによって、こういうインパクトにもつながるねという話が見えてくるかと思っています。入れているコンテンツというのは必要なものが入っているのではないかと思っていますので、そこは少し見せ方の問題というところで是非工夫していただけると有り難いと思っています。

一つ前に、ふるさと納税の議論をしていたときに、これは金融機関という立場なのか、大企業という立場なのかありますけれども、恐らくふるさと納税を扱っている人というのは財務部門、経理部署で、この手の農山漁村の課題解決に頭を向けている人ではなかったりとか、そのソリューションを持っている人ではないというのはほとんどだと思っています。

サステナビリティ部署で、今回の議論を経て、ふるさと納税が一つのインパクトを生んでいく手段になると分かっていたとしても、それを財務部門につないでいくというのは相当力技になってくるというのがあるので、それは多分事業部、サステナ部門の背中を押してあげられるような材料、あるいは経理、財務の人たちがふるさと納税、コーポレートとか会社全体のあらゆる税務を扱っている中で、ふるさと納税をやってくださいと言っても、新しい仕事が増えますという頭がやはり先行してしまいます。そのハードルを下げてあげられる記載、ガイダンスなのか、そういうのが少しあると、有り難いというふうに思いました。

○工藤座長 大塚さん、どうぞ。

○大塚委員 解決策が一つでないというところに関して、私は違和感を持っています。ただ、24 個のロジックモデルを作っていたと思うんですけども、これも多過ぎるから何か減らせるのではないかと思って見ていたんですけども、とはいえ余り企業側として、こういう出し口もあるだというきっかけを作ろうと思うと、何かやはり一定程度ある方がいいなとも思っていて、24 個見ても、確かに一つ、二つ削れても多い方がいいなという気はしているものの、それぞれに対してこういう、このロジックモデル、こういう例がありますみたいなところまで用意していこうと思うと、結構大変だし、それこそ増岡さんがおっしゃっていたような固定化みたいな、この課題に対する答えはこれ一つだみたいな方にもなりかねないなと思っているので、ちょっとこの辺は今後の農林水産省として

どういう方向性で進めていくのか、パターンを多く見せたいのか、もうちょっと例示だけで自由にやってくれ、みたいなところなのかというのは方向性はあるといいのではないかなというふうに思った次第です。

○工藤座長 ありがとうございます。
平塚さん、どうぞ。

○平塚参考人 今の方々の発言を受けてというのとそうではないのもあるので、三つありますけれども、一つは事務局の方にお伝えしてあるんですが、これはなかなか難しいかもしれないですけれども、農山漁村をどこかで整理した方がいいかなというのがあります。

辞書的な定義はないのかもしれないですけれども、この検討会、ガイダンス上ではこういうものを指していますと、例えば自治体単位ではないということ、そういったことはちゃんと書いてあげた方が、本当に関係のある人が読んだときに、自分じゃないなとか、そういう勘違いが起きないようにした方がいいかなというふうに思っています。

それと今の平塚さんとか増岡さんの議論にあったロジックモデルの解決策は1個じゃないよねという話なんですけれども、これはロジックモデルに空白というかのり代みたいなものを作ってあげて、これは完成系ではないというような、例えば空白の箱を1個作るだけでもいいと思いますけれども、皆さんで考えてくださいます余地を残してあげると、勘違いもされないし自分なりにこういう解決策があるとか、そういった思考になるのかなという気がするので、そういった余白があるといいかなと思っています。

最後なんですけれども、これまで我々も企業側としていろいろなメリットが何かとか、多面的機能がなくなったら困るでしょうという話をしているんですけれども、余り損得感情による資金拠出みたいなロジックだけで攻めない方がいいかなという気がしていて、これは竹下さんが言っていたソリューションに帰結するかなと思うんですけれども、もっと都市の人と農村の人が交流することで、共感を生んで自分たちと一緒に何かやりたいなという気持ちになったときには初めてその次の、事業でこういうサポートができるかなという気持ちになる気がするので、そういう意味ではふるさと納税のマッチングイベントみたいなもの、そういうのは積極的にやっていって、交流を増やしてあげた方がいいかなと思っています。

○工藤座長 ありがとうございます。

そうしたら、いろいろ御意見があったんですけれども、論点としては、後半あと1時間、使い方としては七つのインパクトはどうなのかという話と、もう一つはどちらかというと出口というか、事例としてのコミュニケーション、竹下さんが挙げていただいた、後半コメントもあったところで、これは本当に次のファーストステップに落とし込んでいくといふときの、最後のパートの増強みたいなところ、この二つを少し議論できればと思います。

七つのインパクトのところは、これ自体を動かすということではなくてもいいのかなという気は私は個人的にはしているんですけれども、ただ多分ガイドラインの中での登場の仕方としてちょっと唐突感がある。かつ結構この前半に2回ぐらいで皆さんでかなり議論したパートであるものの少しさらっといっているというか、表に登場しているんだけど、この七つが一体どういう意味を持つのかとか、これが正にちょっと言葉がかなり人によってはとらえ難い言葉だったり、あとすごく抽象度が高いので、これが農山漁村とどうつながっているのか、みたいなところの説明がされていないところがあるのかなというふうに思うので、七つはキープするとして、ちなみに私は記憶が曖昧になっていて、気候変動は抑制と適用で分けるんですしたっけというのが、そういう話になっていましたかというのが確認ですけれども、いずれにしてももともとこれでいこうとなっていたところは余り動かさなくてもいいのかなと思います。

このデリバリーの仕方は少し工夫が必要かなと、平澤さんが多分おっしゃっていたのは、多分この言葉だけ見て、この表に登場するのをぱっと見ても少なくとも主な読み手の一つ

である自治体の職員の方は全くぴんと来ない。これが唐突に出てきて一体これは何のことだろうと思うという状態だと思うので、その辺りをどういうふうに、これは自分のやっていることと関係あるなと思ってもらうという工夫ができるかなというところですかね。もうそもそもちやぶ台返しでいこうということを含めて、開いて議論していいと思うんですけども。

もう一つは最後の本当にちゃんと実装につなげるという意味でいうと、コミュニケーションのところでここも結構さらっと書いてあります、最後、一、二ページぐらいのところ、よしじゃあ次はここに連絡してみるかというふうになるような工夫というのでアイデアを出していただけるといいのかなと思います。

あと事例はかなりいろいろなところで是非増強したいという話もあったので、聞きながら思い出したものとか、具体的に議論すべきことがあれば出していただければと思います。平澤さん、どうぞ。

○平澤委員 今までの議論を聞いていた中で自分なりにちょっと整理をしてみたんですけども、ロジックモデルはちょっと置いておいて、ピックアップする事例というのをどんな事例をピックアップしていくのかという話に近いかなと思っていて、今、事例として挙がっているものは割とふるさと納税の事例とか、都市からお金が入った事例という形だと思うんですけども、多分本来出すべき事例というのは、社会的インパクトの創出につながっているような事例を出すのかなと思っていて、その社会的インパクトに出す事例を掘り下げていくとロジックモデルにつながっていくという話なのかなといったときに、それまでのインパクトが地域経済の活性化と言われても、やはり具体的に何がどういうふうになったから、みたいなことが分かりたいなと思っていて、とはいえ地域での取組が果たして、これは地域経済の活性化につながったんだと瞬間的になるかというとなかなかそうじゃないけれども、短期、中期、長期で見えていくのか、方向性としてこれに合致しているよねみたいな話でいうのか、そういったところの話というのができてくると、インパクトを置く意味というか、そのインパクトはこういうことだった、まで腑に落ちるのかなというところだったので、僕もこの七つを引っくり返したいというわけではないんですけども、というところで、七つをどう表現するのかみたいなところで、先ほど工藤さんがおっしゃっていただいた、もう少し丁寧に説明をしてあげないと、なかなか自分たちのつながり、活動等が難しいかなというところがあるかなと感じています。

○工藤座長 ありがとうございます。

正に事例という言葉は飛び交っていますけれども、何の事例なのかというところ、多分幾つかパターンがあるのかなと思ってまして、今の話だと、多分Whatの事例とHowの事例があるかもしれないですね。Whatというのが、七つのインパクトで事例で列挙されているものがそのインパクトの中身とは一体何のことを言っているのかということを知りやすく、伝えられるような事例、それは何のことを言っていますかというのは説明しなきゃいけないということですが、その上で、ネイチャーポジティブといったときに、例えば企業が関わったものとか、若しくは自治体主導でやったものでもいいかもしれないですけども、こういう活動のことをネイチャーポジティブというインパクトを創出する事業と言っておりますという、Whatの事例と、あとは今既に載っているようなふるさと納税とか、インパクト投資、ソーシャルインパクトボンドみたいな、Howの方の事例と多分ちょっと分けけて書くといいのかもしれないなと、今、平澤さんの御意見をお伺いして思いました。

増岡さん、いかがでしょうか。

○増岡委員 最初の平澤さんのお話を聞いたときに、私が思ったのは、このインパクトは農山漁村が維持し、持っている機能などがもたらす価値が何かというのをこのインパクトという言葉で示そうとしたときに、ある種関係者が多い中で、最大公約数がとりやすい次

元だとか言葉だというふうに思いました。これは金融機関の人から見ても非常に手触り感がないし遠い感じがするワードであることは間違いないです。金融機関に限らず企業にとっても。

私はサステナ部署にいますけれども、まだこういうワードにはなじみがありますけれども、実際、フロントだとか実務をやっている人からすると、ネイチャーポジティブと言われても、ウェルビーイングと言われても、これはみんな手触り感がないと思いますけれども、地域の方とか企業の方、いろいろな階層等、主体、地理的分散を含めて、公約数が取りやすい。身近に感じる上では、最後の方に平澤さんもおっしゃっていましたが、短期、中期、長期と見たときに、多分中期とか長期に書いてあるようなレベル感の話というのは比較的、地方の方とかあるいは企業のアクティビティともつなげやすいものなのではないかと思っていますので、そこは読み方をロジックモデルのところ補足することで、大分解消するのではないかと思います。

これはどのレベルをとっても金融機関にとって、直接的な事業ではないです。ただこのアクティビティのところ、まだ今は入ってないですけども、事務局と話をして途中で何度か申し上げたグリーンローンとかサステナビリティ・リンク・ローンのガイドラインでインパクトをもたらすプロジェクトとか資金使途だと列挙されているということをここで例示していただくということだったので、そうするとこの金融機関にとってもファイナンスとのつながりというのが見えて、入口から入れて、最後、長期、インパクトということで組織として求めているものとか、あるいはファイナンスでターゲットに置いているもの、インパクトというところにつなげていけるのかなと思ったので、ある種せっかく作っていただいたロジックモデルの活用というところでインパクトの課題というところは解消するという方向ではどうかなというふうに思いました。

○工藤座長 ありがとうございます。

国司さん、どうぞ。

○国司参考人 今の話については、事例のところをどういう感じで出すかというところをちょっと皆さんに今回きちんと共有できてなかったというところもあるので、そのイメージを今から共有させていただいて、その上でどうしていくといいか御意見を頂けるとよいのかなと思いました。

事例についてなんですけれども、先ほど述べたとおり七つのボトルネックの解消策についてそれぞれアクティビティを出しているもので、全部で多分 25 ぐらいのアクティビティの数になるのではないかと思います。

それはそれぞれについてというところで、A4の1枚ぐらいのところではそれは25事例あるみたいな、そういう補足資料を最後に作ればと思っておりまして、内容としては上にロジックモデルのところを書いて、詳細を見せますとまだイメージなので、ここの内容がというわけではないですが、その一つ一つのアクティビティというところが七つのインパクトにどうつながっていくのかというところを示したロジックモデルというところを掲載し、その上で、さっき増岡さんからもありましたとおり、金融機関の方々は資金使途が何かみたいなのを気にされるというところもあるかと思ったので、環境省とか金融庁のガイドラインに沿って、これは資金指導だとかこういうものですよというところを指し示すというようなロジックモデルを作成し、その下に取組事例として実際にそれを解決している事例を入れていこうかなと思っています。

これについては、企業版ふるさと納税か、インパクトファイナンスというHowのお話というよりは、その取組事例というところがどういう課題を解決しているのかというところをちょっと重点的に書くような事例にしようかなと思っていますので、必ずしも企業版ふるさと納税とかで資金が注入されている事例というわけではないですけども、その取組をすることによって誰がどういうふうに課題が解消されるのかというところが分かるような形で事例を入れていくというような構成で考えておりました。

なので、そこは平澤さん、増岡さんが言ってくださったところとも通じるところもあるのかなと思いつつ、その上でこうした方がいいんじゃないかみたいなところの御意見がありましたら頂けると有り難いと思った次第です。

○工藤座長 今、映していただいているのは補足資料、参考資料として一番後ろに付くものですか。

○国司参考人 はい、その想定です。

○工藤座長 そうすると、本文の方は表が残って、それに対して七つのインパクトに関しては何らかの説明をしていくということですか。

○国司参考人 そうですね。七つのインパクトに関する表が残るということですよ、おっしゃっていただいているのは。

○工藤座長 はい。

○国司参考人 その詳細については補足資料という形で書き加えていくという想定かなと思っております。

○工藤座長 なるほど。ここの部分についてはいかがでしょうか。
あと事例のところですかね。
どうぞ、平澤さん。

○平澤委員 どんな課題を解決したのかみたいな話のところも大事だなと思いつつ、それがどういった成果につながったのかみたいな話も欲しいなというところと、あとはさっきの竹下さんの御指摘のどうやって共創を作っていくのかみたいな話でいうと、そういうその事例が生まれた背景みたいなところまで掘り下げた方がいいのか、ちょっとそうすると事例集をめっちゃ作るのは大変だぞと思いつつながら言っちゃっているんですけども、事例集まで入れるのか、あるいは自治体と企業の出合い方みたいなところは別途農林水産省さんの方で実証実験を作ることすらもイベント化してしまうみたいな、そういうやり方もしかしたらあるのかと思ったりするんですけども、その辺、どうなんですか。実際に事例集を作るとなるとハードルはめっちゃ高いぞと思ったんですけども。

○工藤座長 国司さん、いかがですか。

○国司参考人 そうですね。ありがとうございます。

正直申し上げますと、確かにちょっとこの2週間でとなると、恐らく事業者さんへのヒアリングというのが必要になってくるころかなと思うので、ごめんなさい、現実的に考えてだとちょっとなかなか難しいところもあるのかなというところです。

あとこちらについては農林水産省さんからも補足していただけたらと思いますけれども、たしか来年度のその事業の中に、官民共創の事例というのがどういうプロセスで作られたかみたいなところの詳細調査をやられる予定だったかと記憶しておりまして、よければそちらの事業概要の説明も頂きつつ、平澤さんがおっしゃっていただいたことは来年度の中で解消できる可能性もあるのかというような点について、農林水産省さんから御意見を頂ければと思います。

○工藤座長 朝日さん、お願いします。

○農村活性化推進室長 平澤さんがおっしゃっていることは全くごもっともだと思います。実際、政府全体でも優良事例の普遍化と総理はよくおっしゃいますけれども、優良事例を出したところでそれをそのまま広げていくというのはすごく難しい。面的な広がりや地方創生1.0のときにはなかった。それが失敗だったと総理もよくおっしゃっていて、それを新しい掛け合わせによって、異業種の方々と組むことによってイノベーション新結合を起こして、かつ広げていく、そしてそれをやろうとするときに、どうしても普遍化と総理がおっしゃるのは、取組自体をもう少し抽象化して、それをどういうところに気を付けなければいけなかったのか、何がボトルネックだったのかみたいなことを、多分それぞれの掛け合わせであればあるほど、プレーヤーごとに視点が違うので、そういったところをもっと抽象化していくみたいな、そういう取組、正にチェック項目づくり、グッドプラクティスづくり、そういったことがやはり必要になってくるんだろうなと思っています。

今回はガイドラインであり、かつセオリー・オブ・チェンジというか、ロジックモデルを考えていく上で、まずちょっと全体像が見えなければいけないので、平澤さんからもありましたけれども、それを尽き詰めていくとそれを一個一個やっていくことになるんですが、それをちょっとこの3月の間にやるというのは物理的には難しいだろうと。

一方で、これをまとめていくと、最終的にいろいろな優良事例で集めてきているわけですが、こういうところ、例えば弘前市の事例なんかも今回さんざん取り扱い、さんざんという言い方でなく、たくさん取り扱いましたけれども、すごくいい事例だと思うので、すみません、私の言葉選びが今おかしかったですが、たくさん取り扱わせていただいて、そういう人を例えば呼んでくるような取組というのは、弘前市さんのみならずいろいろな方々がやられていて、そういうニーズがある取組というのは、たくさん取組がなされていて、そういった方々のものを集めてきて、取組事例が多いものが結構ありますので、濃淡ありますので、そういったものを代表的に取り扱って分析してみるとか、そういう普遍化の取組みみたいなことを来年度やらなきゃいけないのかなと思っています。

そういう意味でも、まず今年、外観、Whatというところ、アクティビティのところでもまず網羅的にそろえて、その中から抽出して分析していくものを幾つか、ここがクリティカルポイントだということを選んでやっていくみたいなことができればいいのかなと思っています。それはちょっとまた来年度以降是非そういう視点で取り組みたいと思っていますので、これは続きものとしてやりたいと思っていますし、そういう意味では平澤さんから御提示いただいたような話というのは、例えば報告書に今後の検討事項として注記して、論点として残していただくということが非常に意味のあることなのではないかと思っています。

○工藤座長 ありがとうございます。

正にそういう意味ではこれを出した後が勝負というか、来年何かいろいろなことが仕掛けられるといいなと思います。

ほかの方、いかがでしょうか。

事例創出のコミュニケーションというところかというと、今日、お話を聞いていて、やはり読み手が三者三様って結構大変よねと思って改めて聞いていまして、やはり企業側からすると逆に企業側のニーズとかペインが余りこれだとしてないよねというものもあると思いますし、自治体側からすると、この言葉だと通じないというものもあるので、痛しかゆしみたいところが付きまとうわけですが、秋元さん、これ例えばなんですけれども、インパクトスタートアップ協会でも一次産業ワーキングみたいなものがあるというのが初回であって、スタートアップ、これが出た後に、秋元さんがこれを使って何かやるとすると、どういう出口がありそうかという感覚はありますか。

○秋元委員 例えばスタートアップに対しての働きかけとか、そういう感じですか。

○工藤座長 はい。

○秋元委員 スタートアップだとやりやすいなと思っています。比較的感度も高いですしアグレッシブで、どちらかというとなんか新しいことをやっていこうみたいな感じなので、アクションとしてはこういう動きがありますよというところのシェアと各企業がそれぞれできることを出してやっていきたいと思いますのはイメージが付きやすいなと思ったんですけども、どちらかというとなんか地元の会社さんとか、自治体さんも近いと思いますけれども、なかなか自発的に情報をキャッチしに行かなかったり、余りそこの緊急度が高くないような方々に対して、どう動かしていくかの方が結構難しいなと思っているので、どちらかというとなんかスタートアップというよりかは、ローカルなイメージしながらやっていく方がいいかなと思っています。スタートアップの中にもローカルで取り組んでいるところがたくさんあるので、そういう先に動く地域のインパクトスタートアップみたいなところがある意味火付け役となって、このガイダンスを見た後のアクションとして動きを、その先にもう少しちょっと感度が今は高くないけれども、ポテンシャルのある企業さんとかが乗ってくるみたいなものを作れたらいいかなという気がします。

一気に全部届けようとせずに、ある意味、最初にこれを見てとかこういう動きがあるというのを知っていただいて、すぐに動いてくれるような人たちにまず届けて、その人たちが更に広げていくみたいな、段階を踏めたらいいのかなと思います。

○工藤座長 ありがとうございます。

朝日さん、どうぞ。

○農村活性化推進室長 今、秋元さんがおっしゃったことというのは、正に我々も来年以降目指していることでありまして、今回、これを見せることによって、アクティビティ案というのは幾つか見えるわけですけども、そのアクティビティ案を見て、こういうのはインパクトにつながって、社会的インパクトにつながっているところを正に変化量までは見せられないかもしれませんが、ただ定性的にインパクトにつながっていること、つまりそれは公共の利益にもかなうということなんだということをお示しできることというのは非常に大きいと思っています、それを感度の高い方々にまず届けて、それに対して自分たちもこういうことをやってみたい、あるいはそういうのを手伝ってほしいということに対して国側からもしっかりとアプローチをさせていただく、例えばこういう案件形成をしようということについては、ある程度お手伝いをしたりとか、こういう正にクラウドファンディングで資金提供を求めたいという方々がいたら、それは皆さんを紹介したり、そういったこともできますし、案件形成にある程度国側の人間を派遣してとか、農政局の人間と一緒に場をセットしてとか、農山漁村振興交付金とか地方創生の交付金とか、そういったことを正にツールとしてお示しして、というところで手助けできるということがまず一番大きいところかなと思っています。

そうやって感度の高い方にまず届けて、それがやがて広がって行って、だんだん感度は今余り高く持っていない方に対しても、その量で目に付くようにしていくという、その広げ方をしていくということなのかなと思っています、結構今年、我々も実証事業で官民共創を中間支援事業者の方に入ってもらって、マッチングするみたいなことをやったんですけども、やはり一つ課題だなと思ったのは、その感度の高い低いがあって、特に市町村の方々は共生することもできないので、正直いいよと思っている方から、本当にこれを何とかしなきゃいけないと思っている方がいて、それを市町村側からなかなかアプローチしようとする、そこまでやらなくていいよという方を動かすこともできないのでなかなか難しいところもあるので、であればそこに対して無理にこ入れをするということよりも、まずその感度の高い方から、ある意味ソリューションを持っている人から逆ポジションで感度が高いというか、本当に興味を持っていて何とかしなきゃいけないと思っている方から、市町村の方々に届くようにする、手が挙がるようにするみたいな、そういうようなアプローチの仕方をよりできていければいいなと思っています。

て、そういう意味で秋元さんが先ほどおっしゃったことというのはすごく我々としても来年以降やりたいと思っていることでもありますので、そういう届け方がうまくできたらいいのかなと思っているところであります。

私から補足でございます。

○工藤座長 ありがとうございます。

ほかにかがででしょうか。あと耳に残っている論点としては、インパクトに社会的を付けるか否かということがあるんですけども、これは何か、国司さん、悩みポイントとしてはどういう、付ける、付けないでどういう分岐がありそうみたいなことというのはありますか。

○国司参考人 今回の場合、インパクトというところをどこまで置くかという話だと思っていて、社会的インパクトというのはソーシャルな文脈だけを指すのではないかという感じられ方をされる方もいるんじゃないかというような指摘があり得るのかなと思っています。

そうなったときに、今回の範囲で社会的に限らず、その環境のインパクトも含むという話になるので、ちょっとその辺りは誤解があるとよろしくないと思っております、ここもちょっとインパクトの流派にもよるみたいところは先週増岡さんにお話を伺っていたところなので、今回のターゲットを見たときに、どういう言葉遣いをするそこがそごなく受け入れていただけるのかという観点から、工藤さんの御意見も踏まえて皆さんで合意形成ができたらと思った次第でした。

○工藤座長 そうなんですね。界限の方が見ると違和感を持つというところが結構悩ましいポイントとしてあって、とはいえ初見の方、なじみのない方が分かりやすいということと結構バランスが難しいところではあるんですけども、インパクト投資をやっている人とか、インパクト評価系の一般的なもの、基本的には今、最近は社会的はもう取っちゃうとか、ただインパクトという方が多分一般的、若しくは社会環境インパクトという感じですね。

確かに社会的インパクトと言うと、ESGのSの部分でしょうというふうに人によって捉えられるというのはあるのかなと思うので、思い切って取ってしまうか、社会環境インパクトと言い直すかみたいところはあるかなと思いますけれども、安本さん、この辺り、地銀さんとかで言うとうんぬんというのはまたちょっと、私はちょっと細かい点でコメントしましたけれども、多分インパクト投資という言葉の使い方とか、インパクトデッドというのもちょっと、余り一般的ではなかったりとか、細かいなという感じがするかもしれないですけども、逆にちょっとそれこそ静銀さんみたいに、サステナファイナンスをやっている人からするともうその時点でちょっと気持ち悪くなっちゃうみたいなのがあると思うので、用語の揺らぎみたいところはかなり最後調整した方がいい気がします。

安本さん、どうぞ。ちょっと聞こえにくくなりました。皆さん聞こえていますか。安本さんのところがもしかして通信状況が。

○安本委員 私の発言をまた一から。ごめんなさい。

社会的を付ける、付けないの議論でしたよね。先ほど工藤さんのお話を聞いていて、やはり社会的というふうに付けるのは少し限定的な印象を受けるのと、インパクト投資の前に社会という言葉は余り付けてないよねというところがあるかなというふうに思います。

これはちょっと追加すると、インパクトデッドという言葉自体はまだ私たち金融機関の中で余り一般的にはなっていないかなというところがあって、これはこの前、先週、Ridilover さんとの打合せの中で、どこまでインパクトデッドについて細かく書くかというところは論点があるのかなというところは私の方から申し上げさせていただきました。

○工藤座長 ありがとうございます。

この点、ほかに御意見ある方はいらっしゃいますか。大丈夫ですか。

安部さん、どうぞ。

○安部参考人 議論、賛成ですというだけなんですけれども、大きなトレンドとしてインパクトという言葉に集約していった方がグローバルな議論ともよろしいのではないかと考えたので、先ほどの工藤さんの話、あるいは安本さんたちがおっしゃった話に賛成ですということです。

○工藤座長 いかがでしょうか。

皆さん、言いたいことは言い切ったという感じでよろしいですか。

あとはもう完成版が世に出て、皆さんのところに問合せが相次ぐということになりますので、委員に名前が載っていましたけれども、これってという問合せが来るということで大丈夫そうでしょうか。来るか分からないですけどね。

○安部参考人 来るように頑張りましょう。

○工藤座長 はい。もしよろしければ、朝日さん、もし何かほかの提案がなければ、もしよかったらお一人ずつ、ファイナルリマーク的にコメントし残したこととか、来期に向けてこうしていけたらいいよね、みたいな、このメンバーがどういうふうに引き続きどうなるかというのは全く白紙だと思いますけれども、最後のコメントをお一人ずつ頂いて閉めるという形でもいいと思いますけれども、事務局の方で何か追加で議論してほしいことはありますか。

○農村活性化推進室長 まず、事務局の方で何か追加で言うておくべきことがあったら教えてください。大丈夫ですか。

提案、賛成です。そういう意味では、改めて来年のお話をさせていただくと、今回はアクティビティ案とか、ロジックモデルも作っていただき、かつそのそれぞれのステークホルダーの方々がどうやったら案件形成につながっていくかというところを、正に皆さんに議論していただいたとおり、どうやって分かりやすくするかということ、それからこれまでにしているものとの接続をしっかりとすること、そういったことに気を付けて、How toとWhatをしっかりと可視化していくということなのかなと思っています。

それを踏まえて来年度、具体的に先ほど平澤さんからあったように、幾つかの取組、アクティビティの中で取組がよくあるというか、ここは関係人口につながるぞというところに対して、普遍化していくというか、抽象化していくために必要なそれぞれのステークホルダーの取組は何かという、そういうチェックリストみたいなものを作っていければいいなとか。

それから、正にアクティビティに載っているようなものは、これはインパクトにつながるということに認定されているわけなので、そういうものに対して、幾つか具体的にソリューションを持っていらっしゃる方々の取組を実証的に幾つか選んで、それに対して応援していくようなそういう実験的な取組をやってみたりとか、そういったことをやるとともに、それから支援証明書の話というのもこれまで出てきていましたけれども、そういう金銭的、あるいは人的に支援を頂いたような企業さんに対してどうやってそれを我々として応援できるか。つまりそれは評価をすることに対する証明であり、かつ表彰の仕組みみたいなことを考えていかなければならないというのが来年度の検討事項かなと我々としては認識しています。

それは当然その企業さんにとってメリットがあるものでなければいけないので、それはすなわち企業さんの付き合っている相手である顧客、投資家までいくか分かりませんが、最終的には投資家であり、そして何より一番最初に訴求するのは従業員の方々、そ

の会社に入りたいと思っている方々に対しての訴求が今一番効果が最初に出るのではないかと思います。そういったところに対してどこまでの取組を評価すればいいのか。また、どういう支援証明みたいなことをして、それを認定したら訴求するのかということをしつかりと検討していくみたいなのもやっていかなきゃいけないという問題意識があります。

それをどういうスケジューリングでやっていくかというのは、調整しておりますけれども、あと資金の集め方、クラウドファンディング型といってもなかなか、どこに問い合わせればいいのでしょうかとか、そういうこともあると思いますので、あと農山漁村振興交付金とか、新地方創生の交付金とかそういうのをどうやったらアプローチできるのでしょうかというツールの問題もあるので、そういうところに対してのアプローチの仕方等々、実装に向けた取組みみたいなところの解像度を上げていくみたいなのをやっていききたいということでもあります。

そういったことに取組もうと思っているという、我々の考えも皆様にも御認識していただいた上で、今回議論いただいたこととの接続の問題もあると思いますので、是非ちょっと今回いろいろ議論したけれども、この論点が残ったとか、これは来年度更に検討したらいいんじゃないとか、そういったことを御提案していただけたら、なかなか物理的に限りがありますので、できることできないことがありますので、そこは御承知おきいただきたいですけれども、是非ちょっとヒントにさせていただければと思っております。

個人的にも企業版ふるさと納税について、主に議論していただきましたけれども、もちろんそれがインパクト投資に広がったらいいねという議論もあったものと承知しておりますし、そういうことを更に深めていくような議論をしていかなければいけないという、そういう話題もあったかと思しますので、そういった話も含めて是非皆様から一言ずつコメントを頂ければと思います。よろしく願いいたします。

○工藤座長 ありがとうございます。

では、委員リストの下から順番にということで、安本さんから、時間も迫ってきたので1分ぐらいずつで皆さん最後の一言を言って終わりにしたいと思います。

○安本委員 今、朝日さんに言っていたように、この件というよりもう少し来年度以降とか中長期的な観点でということと言うと、これは私たち地域金融機関としてこういった座組みに入れさせていただいて、経営も含めて地域金融機関が果たすべき役割というのがもう少し深掘りしていてもいいのではないかというのが実際にテーマになっております。

今、インパクト投資とかインパクトデッドみたいなところがこの座組みでいうと、金融機関の役割のように書いていただいておりますが、これだけが解決策であるのかというのも含めて、来年度以降地域金融機関のこの分野との関わり方というものを議論させていただく機会があったらいいなというふうには思ったところでございます。

それともう一つ、先ほど、まずは自治体というお話を聞いて申し上げたんですけれども、その後の皆さんの議論を聞く中で、やはり課題解決したい企業というのが極めて熱量があって、動き出しというのもこっちの方がもしかすると機能するのかなという感じもしたので、その発言はちょっと取り下げといいますか、この3者が一緒になって同じ絵を見て、一緒にこの世界を作っていくというものに多分このガイドライン自体もこの3者に向けて発信しているものだと思っておりますので、そこについてはそういう認識をいたしましたというところでございます。

○工藤座長 ありがとうございます。

今、お話を聞きながら思い出したんですけれども、前半に出ていたローカルの企業の事例、中小企業さんとかがあるといいよねという意味では、安本さんに前々回でしたか前回か、事例紹介をしていただいた TeaRoom さん、中小企業庁さんと一緒にやっている、TeaRoom さんは東京の会社だと思っておりますが、そこが今、静岡でお茶屋さんと一緒に

やっているのとかは、事例としてはすごく面白いかもしれないなというふうに思いました。
増岡さん、お願いします。

○増岡委員 この検討会を通じて、インパクトというキーワードを軸にいろいろな農山漁村と地域のプレーヤー、企業、いろいろなプレーヤーのつながりというのが議論されて、これが一つの文章になって出てくるということでもありますので、これはやはり各金融機関、自治体とか企業、それぞれ単体で動いてもできるような話ではないと思っていますので、安本さんからあったような、各プレーヤーがいかに共創していくか、オープンイノベーション、みんなで作っていくというところをつなげていく、コレクティブインパクト、カタカナで恐縮ですけども、そういうものにつなげていくというのが非常に大事かと思っています。

農林中金だけではないですけども、金融機関、これまで言語化、数値化、定量化されてこなかった、農山漁村の価値とか環境的、社会的価値というのがインパクトという評価の中で、見える化されていくということで、そこを事業とどうつなげていくかというのが、これは日本だけではないですし、グローバル含めて相当盛り上がっていて、この流れの中でこの議論、ガイダンスが出ることは非常に大きな意味を持っているかなと思っていますので、その委員に入れていただいた一人として、是非このガイダンスを持っていって、実践につなげて事例を作っていくというところにも参画していきたいなと思っていますし、これを土台に発展的にこういったメンバーとの協働も含めて、取組が進められていくと非常にいいなと思っていますので、引き続きよろしく願いいたします。

○工藤座長 ありがとうございます。
平澤さん、お願いします。

○平澤委員 一番事例を作るのに分かりやすい自治体はここにありますがただ皆さんにお伝えさせていただくと、あとは別の事業で我々田舎と都市を結ぶ取組をやっているんですけども、4年やって初めの頃はどうしても都市の人がやってあげている感覚であったりとか、田舎が頼ってしまうみたいなのがあったりして、4年やってやはりマッチングする際に一番よかったのがW i l l の部分の共感というところが非常によかったなと思っています、ふるさと納税みたいな仕組みも単に仕組みを活用するだけではなくて、仕組みを通じてどこを目指すのかみたいなところがすごい大事だなと思っていますので、今後、この仕組みが、今回下ごしらえとしてガイダンスができたというところで、本当にどう活用していくかのところに力を入れていくというのがすごい大事だなと思っていますので、是非皆さんが優良事例と一緒に作ってもらえるというのが実現したらうれしいなというふうに思っております。今回はありがとうございました。

○工藤座長 ありがとうございます。
田中さん、お願いします。

○田中委員 企業がなかなか農山漁村に入っていくというのはハードルが高いと思うんですけども、そういう中ではレポートにも入っていたかもしれないですけども、総務省の地域活性化起業人みたいな、ああいう仕組みはすごく入っていきやすい一つの仕組みなのかなと思っています。ですので、ああいった仕組みとうまく連携しながら企業が農山漁村に入っていくというのは、すごく早いかなと、それにまたいろいろな事例があるのかもしれないと感じています。

あと個人的にはハードルが高い中で、本当は国民全員がメリットを得る話だと思うんですけど、この一次産業、食がしっかりしてくるというのは、なので、国がもっとなかば強制的にじゃないですけども、企業がそういう一次産業に関わるというところをもう少し後押しする、その中でいろいろなメニューがあって、自分たちはこれを選択しようみたいな

流れを作っていてもいいんじゃないかなと。それに文句を言う国民はいないんじゃないかという、国民の4大義務にしてしまうと、極端な話。それぐらい思い切ったことをやっても個人的にはいいのではないかなと。それぐらい大事な話かなと思っています。

○工藤座長 ありがとうございます。

これは朝日さん、反応したいということはあるですか、今のコメント。手を挙げていただいたのは。

○農村活性化推進室長 横からすみません、今、何人かの委員からあった、まずできたものをしっかりと活用するというお話があったと思いますが、先ほどちょっと言い忘れたと思ったのは、できたものをできた分を公表して終わりにするつもりは全くなくて、むしろそれをちゃんと知っていただくことが必要であるというふうに思っています。いろいろなステークホルダーの方々に。

また、奇しくも田中委員からもありましたけれども、4大義務にできるかどうかちょっと置いておきまして、実際にこれを半ば強制的にかどうかは置いておいても、こういうことがあるんだよということを知ってもらって興味を持ってもらってやらなきゃなという気持ちになっていただくことというのはすごく重要なことで、そういう意味でも農山漁村地域の経済環境創生プラットフォームというのを2月からやっていて、これは結構公表で、もうシンポジウムでは1,200を超える団体の方に集まっていたで、プラットフォームの加入数も自治体と企業で450を超える形になっています。しかも東京のそれこそ大手町、丸の内、有楽町にいらっしゃるような企業さんも結構な数、入っていただいている、そういった方々、もちろん都会だけではなくローカルなところの方々もしっかり入っていただいています。

そういうプラットフォームができたので、そういったところで今おっしゃっていただいたような地域活性化起業人とか、地域おこし協力隊、地方創生の交付金、企業版ふるさと納税とか、そういった制度があるということを知ると企業さんはまだまだ全然知らないわけなんです。そういうことをやはり発信していこうと思っています。そういうのが使えるんだよ、是非一回やってみてくださいよということと言えなきゃいけないし、その何かに絡めてインパクトを皆さんに作っていただいたガイダンスをそこでもしっかりと取り上げて発信して、国としてもこういうコミットしているんですよということを積極的にどんどん発信して訴求させていこうと思っています。

我々は、クレディビリティがあるということが国としては一つの強みですので、それぞれ登録企業の方々に個別に御紹介していくということをやりながら、先ほど申し上げたような個別の案件形成みたいな実装の方にも移っていきたいと思っていますので、そこは是非最大限有効活用してやっていききたいと思っていますので、無駄にはしないというか、しっかりと国としても頑張っていきたいと思っていますので、それをちょっと皆様にお伝えしておこうかなと思います。横からすみませんでした。

○工藤座長 力強いコメント、ありがとうございます。

竹下さん、お願いします。

○竹下委員 今の朝日さんの話はすごくこれからが楽しみだと伺いながら思っていたところです。確かにプラットフォームを今回立ち上げられたのが今後土壌になっていかれると伺っていて思いました。

今回のガイダンスはよかったところでは、何のために寄附するのかというその整理がしっかりロジックモデルをもって通っていったというのはすばらしいなと思っています、ここから本当にお金を流していくというところでいくと、やはり自治体側と企業側の意思決定に対するステップが全然違うというか、自治体側、企業側がどういう意思決定基準に基づいて判断されているんだろうということとか、逆もしかりで企業側も自治体側は予算で

組まれているんだね、だからこういうふうを考えられるんだねという、双方がしっかりお互いのロジックを理解し合いながら、じゃあこの落としどころだったら一緒に実現していけるよねという、ここで手を取り合えるような何かいい出会いの場というか、それを作っていくというのが今後すごく大事じゃないかなというふうに思っていて、そこにプラットフォームが今回生きてくるんじゃないかなと先ほどもお話を伺いながら感じていたところでした。

あともう一つは、私自身も昨年からはふるさと納税の事業とか担当していますけれども、去年は企業版ふるさと納税はここまで言われてなかったと思っていて、この数か月ぐらいで急に企業版ふるさと納税、地域活性化起業人、いろいろなところで聞こえ始めてきたという感じを思っていて、縦割りの中ではなかなか難しいですけれども、ほかの省庁からも、総務省さんいろいろ事業、制度をお持ちですし、逆に経済、商工の方からもやはり地域の事業立ち上げ、地域活性化起業人を使えたらとか、結構いろいろなところから声が出てきているので、何かそこを連携しながら束になってできるともっと大きなムーブメントになっていくのかなと思ったりしておりました。

私自身もすごく勉強になりました。ありがとうございました。

○工藤座長 ありがとうございます。

大塚さん、お願いします。

○大塚委員 まず、事務局の皆様、大変だったと思いますが、引き続き頑張ってくださいというところと、うちの会社、ポケマルチャレンジャーアワードというのをやっています、今回は数件御紹介しただけなんですけれども、今年で4回目、5回目になるんですけど、漁師さん、農家さん、ソーシャル的な取組を表彰しています、これまでに200件近くいろいろな取組を集めて表彰しています。

このパターンでいうと、24個全部は無理ですけれども、多分8割くらいは当てはまる事例が、農家さん側としては現場側としては多分あるので、そんなところに御提供できるので、それに自治体若しくは企業の支援というのをひも付けていくみたいなのだと事例の設定性としてもやりやすいのかなというふうに思っています。

これはちょっと半分宣伝ですけれども、来週火曜日に『関係人口』という本を高橋が出すんですね。前回は2016年にそもそも関係人口という言葉が最初に言い出したわけですが、そこから8年たって、様々な現場、あとはいろいろな思想、哲学みたいなものを様々な方向から関係人口を論じた本になりますので、正しく今回の議論にふさわしい内容になっていると思いますので、是非読んでいただけると、第1章はむちゃくちゃつまらないので、第2章からは是非読んでいただくと関係人口がよく分かっていいかなと思います。

我々も国土交通省さん、総務省さんと二地域居住のところの議論をかなり進めています。その中でいうとやはり農山漁村ですと、遠いところにありますので結局行くのに交通費がかかる、そこをどうやって対応していくか。

例えば、個人の負担というのは難しいのであれば、そこを負担している企業から税制控除できないかとか、いろいろなことのアイディアを出しているところです。それとこの企業側の認証制度みたいなものをうまく組み合わせると、例えばそういった点でより人を地方に送っていくというところが加速するかなと思いますので、是非引き続き連携しながら進めていきたいなというふうに思っている次第です。

○工藤座長 ありがとうございます。

秋元さん、お願いします。

○秋元委員 朝日さんから先ほどもありましたけれども、ここからガイダンスが作られてしっかりデリバリーされていく、しっかり届けるところをやっていきなと。先ほど朝日さんがお話しされた国の方で動いているのもありますし、私たち個人としてやはり地上

戦もすごく大事ななと思ってしまして、仕組みで広がっていけばいいですけども、結構一人ひとりがその目の前の人に伝えていくという地道な活動も非常に大事ななと改めて感じました。

先ほど大塚さんからもありましたが、私たちもちろんつながっている生産者さんや自治体さんに対しての働きかけもそうですし、今、インパクトスタートアップ協会の中で、一次産業スタートアップを束ねていろいろ活動していますので、そういったスタートアップへの働きかけ、今日の議論の中にも出ましたけれども、ある意味いい先行事例を作っていけるように、地上戦もしっかり頑張っていきたいなというふうに感じました。すてきな機会をありがとうございました。

○工藤座長 皆さん、ありがとうございました。

本当にすごくいい検討会だったと私はすごく思いました。一番最初の会でこれを農山漁村の課題を大変だから何とかしてあげようというフレームではないよねという話が結構すっとちゃんと認識としてそろったというのは大きかったと思っています。

さっき田中さんはそれは義務にすべきだということまでおっしゃっていましたが、やはりそういう意識をどれだけ本当に企業側とか、都市の住民として共有できるかというのはすごく勝負どころだなと改めて感じて、そこを大事に議論できたというのはすごく大きかったと思います。

それを実現していくとなったら、いろいろな戦術を駆使しないといけないところもあると思いますけれども、これだけ多様なバックグラウンドの方々が集まって、どちらかというと農山漁村の外からの視線も含めて議論できたというのはすごくよかったと思います。だからこそそのロスト・イン・トランスレーションみたいなところが、正直すごくあって、それ自体が象徴的な話だったなというのもあるので、ここをどうやってその通訳機能みたいなところを作っていくかというのは次のチャレンジかなと思っています。

正に、これは出して、次の実装というか実現させていくというところが勝負だと思しますので、またいろいろな形で皆さんと御一緒できると有り難いと思います。

朝日さんにお戻しします。

○農村活性化推進室長 皆様、最後いろいろ御意見をありがとうございました。非常に有意義な御意見を頂きましたし、なるほどなと思って聞いておりましたし、是非皆様から頂いた御提案をまた来年度以降、3か月しかできませんでしたので、もちろんいろいろ議論しなければいけないことも多くありますし、また次のフェーズということもありますので、よくよくちょっと我々事務局の方で、まずはしっかりとガイダンスを頂いた意見を踏まえて形にしていくということと、次年度以降、それをどう広げていくのか、どういう体制で何を検討していくのかということをお客様から頂いた御意見も踏まえて再整理をしたいと思っております。

工藤座長にまとめていただきましたけれども、本当に短い期間ではありましたが、リーズナブルかつ効率的かつ有意義な御意見をたくさん頂いたものと思ってしまして、様々なバックグラウンドの方がそれぞれの立場でしか気づかないような、そういった形でいろいろ頂いたなと思っています。手前みそではありますが、すばらしい方々を人選させていただいたと思っております。

また、ものができましたらしっかり皆様にもお届けしたいと思いますし、これをどう活用していくかについても個別に是非御意見を賜りたいと思っております。

ちょっと閉じるのは非常に名残惜しいですけども、時間がまいりましたので、今回は改めて皆様、本当にありがとうございました。今後とも是非よろしく願いいたします。という言葉で会議を閉じさせていただきたいと思っております。

それでは、事務局に戻します。

○農村計画課課長補佐 それでは、以上をもちまして、第4回農山漁村における社会的イ

ンパクトに関する検討会を終了させていただきます。

次回は、書面開催となっております。今回で最後にはなりますが、参考人、委員の皆さん、今回の検討会は1か月半、1月20日から始まりまして1か月半程度という短い期間ではございましたが、その間に4回も開催させていただきまして、御協力いただきまして、誠にありがとうございました。

引き続き、ガイダンスを年度末に出す予定ではございますが、それまでの間、様々御確認を頂いたり、御意見を頂いたりということで、事務局の方から御連絡をさせていただければと思います。

引き続きどうぞよろしくお願いいたします。誠にありがとうございました。

こちらで終了とさせていただきます。

午後3時00分 閉会